スポーツ・ルールの改訂とその適応について ～体操競技の場合～

Sports Rule Revision and Its Adaptability : in case of artistic gymnastics

滝 沢 康 二 : Koji TAKIZAWA*

*日本体育大学 : Nippon College of Health and Physical Education, 7-1-1 Fukazawa, Setagaya, Tokyo
(158)

Abstract

This study intends to search for obvious criteria for all involvement in the process of revising the rule in artistic gymnastics. As a starting point, this study probed the Theory of Adaptability by Talcott Parsons, which was leading to a philosophical interpretation of the theory. Why has this study entered the field of Sociology in search for the criteria? It is because sports activities are part of our social activities. And Sociology, as a precondition, is one of the basic foundations of Sports Science. The four elements required to sustain the social system, according to Parsons, are pattern-maintenance, integration, goal-attainment and adaptation all of which must continue to function.

When the four elements are introduced into artistic gymnastics, they will become as follows: Pattern-maintenance : Training activities and study meetings for coaches and judges. Integration : It denotes the various rules in artistic gymnastics. Goal-attainment : It refers to such governing bodies as the FIG and national federations. And Adaptation means various competitions.

As a result, it has become obvious that revision of gymnastic rules became inevitable to avoid confusion in scoring due to anachronistic difference in technical levels and interpretation of artistic gymnastics on a global scale. Thus, revision of rules becomes necessary to solve all those issues. Furthermore, it also meant that revisions were effective measures to solve various global problems.

However, as the revised rules were once not adopted by whole world and became meaningless, it had taught a great lesson to all those concerned. Therefore, all those engaged in the process of revising the rules must fully realize that they should draft rules that are adaptable to the fast moving world of today.

1. 本論の目的と方法

スポーツのルールは今日さまざまな意図をもって改訂されている。他の競技スポーツと同じように、体操競技においてもこれまで頻繁にルールが

改訂されてきた。そこでは常にルール改訂が現状のルールの矛盾回避のためであるのか、今後の進歩・発展を予測してのものなのかという論議を呼ぶ。しかし、矛盾がなぜ起こるのか、あるいは体操競技の進歩・発展とはどういう意味なのか、と

いう根本的な議論をするまでに及んでいないのが現状である。例えば、スポーツの商品化によって諸ルールがそのことに制約されるようなことも起こっている。それは今やスポーツ活動そのものが、一社会的行為であり得るということであり、スポーツが社会全体の動きに適応せざるを得ないということの意味しているかのようである。具体的な問題として、オリンピック競技大会をはじめ、各種スポーツ競技大会は、そこに参加する選手や役員の、いわゆる「するスポーツ」の他に「見るスポーツ」として多くのマス・メディアを通して人々の日常の社会生活に驚異的な影響を与えているという実態を挙げることができる。そして、そこでは選手が当該スポーツのルールに沿ってまじめにプレイしていてもそれを直接的、間接的に観戦している人たちの間では納得し得ないことも起こっている。そのことはスポーツ・ルールの社会性を意味しているものと言えるし、また一方でスポーツ・ルールがそこに参加する選手や役員だけのものにとどまらず、一般社会にも適応し得るものでなければならないということを暗に示唆しているものであるとも言える^{注1)}。つまり、スポーツ活動も社会活動の一部分であり、スポーツ活動であるからといって、一般社会の規範を逸脱するようなことは許されないということである。スポーツ・ルールはまた、主にスポーツにおける競争を成立させたり、スポーツ活動そのもののおもしろさを維持、助長するための意味を持っている。一方、人の生き方そのものを問うところの当為、つまり道徳的義務を示す意味も持ち合わせている。一般的に前者のルールは規則集などに具体的に文章をもって示されるが、後者の場合は殆ど競技者（選手の他、すべての役員も含まれる）の道徳的観念に委ねられている。

体操競技の原形を考えてみると、それは二人ないし、それ以上の仲間同志による技の自慢比べであったということが容易に理解できる。そして、そこには文章化されたルールが存在したわけでもなく、仲間同志それぞれが持つ判断基準によって、ことのよしあしを決していたに違いない。この自慢比べが次第に意味を持ちはじめ、現状のような組織化されたものになってきたとみてよいだろう。更にこのようなことから言えることは、仲間同志

という極身近な集団でつくった組織体系が徐々に広がり、現状のようなさまざまな文化思想によって培われた人が集まってつくられた組織体系に変わってきたということである。つまり、そこには一見誰もが統一的に認識しているかのように見えるルールが存在しているが、実はそこに大きな問題が潜んでいるということである。特に、体操競技は採点の結果で順位が競われるという特徴をもつことから、美意識などですでに客観性に欠けるという問題を抱えている。その上、更に上述のようなスポーツ界全体に見られる社会的諸問題が加わり、採点のための確たるベースが何であるのかさえ分かりにくくなっている。これらの問題は当然のことながら体操競技に直接携わる者にとって納得し得るものではないし、第三者的立場にいる人からみても不可解なこととして受け止められるであろう。そこでは、体操競技の諸規則がそれに関わるすべての人に十分適応していないということが指摘される一方で、なぜ今このような規則であるべきなのか、という一般的な認識不足も指摘されよう。換言すれば、自慢比べのレベルでの諸規則と今のそれとは、それらの持つ意味が全く違っているはずであるが、その点の認識が不十分であるということになる。

以上のような観点から、本論においては今後のスポーツ・ルール改訂のための一助として、取り分け体操競技のルールが真にそれに関わる人々に適応するということはいかなることか、その意味を一般社会の一般的規範に照らし、哲学的に考察していこうとするものである。そして、その契機をT. パーソنزの適応の理論に求めた^{注2)}。

2. パーソنزの社会学理論の概略と本論との関わり

ここでは筆者が本論を進めるに当たって直接手がかりとなったパーソنزの社会学理論の中から社会的行為の体系的理論のごく一部を集約し、本論との橋渡しとしたい。パーソنزの社会的行為の体系的理論は人の相互行為のあり方の分析から導かれたもので、社会の作動メカニズムの解明に貢献するものである^{注3)}。そこでは社会体系を文化体系、パーソナリティ体系、ならびに行動有機

体と共に行動体系の下位の体系に位置付け、更に社会体系以外の三つの行為の下位体系を社会体系の環境を構成する諸要素として考えている。また、行為の四つの下位体系をそれぞれの機能によって、適応（Adaptation）、目標達成（Goal-attainment）、統合（Integration）、形相維持（Pattern-maintenance or Latency）に区分けしている²³⁾。つまり、これらは社会システムが存続するための基本的な機能要件だということである。

第1項でも触れたように、スポーツ活動もまた社会活動の一部である。現代社会においてはその意味が一段と強くなりつつあると言っても過言ではなかろう。競技スポーツの発展段階を眺めてみると、例えば草野球と言われるレベルと、全国的なレベルの高校野球や大学野球、あるいはプロ野球などの公式戦とではそれらのルールの持つ意味合いが違う。つまり、勝敗の結果が社会的に重要な意味を持てば持つほどそこでのルールがより重視されてくる。このような観点から、一般社会にいろいろな意味で強烈な影響を与えている今日的競技スポーツを考える場合、社会学の諸理論を無視できない。本論では、特に体操競技のルールとその適応を問題にしたことから、パーソンズ理論の特徴の一つであるAGIL（Adaptation, Goal-attainment, Integration, Latency）図式の考え方にそのヒントを得た。言い換えれば、体操競技の諸ルールとそれらの適応についての問題を体操競技界の内部と外界との関わりにおいて検討していくことによって、より明確にし、今後のルールの改訂作業の一助にしたいということである。

3. 体操競技というスポーツについて（男子体操競技の史的概観）

体操競技の技術形態をみると、その原形を未文化時代の人の日常生活にさかのぼってみることができる。それは例えば木に登って木の実をとるに必要な動作であったりすることである。紀元前2世紀頃の西ゲルマン族の文化活動から言い伝えられるところによると、ポニーを6頭横に並べてそこを跳び越すという跳馬の原形がみられる。そして、このことは後に「大王跳び（Königssprung）」としてゲルマン民族の神話になった¹⁸⁾。このよ

うに、馬をめぐる行われた運動は古く、文献として残る最も古いものには西暦375年の古代ローマの作家Flavius Renatus Vegetiusの著作がある。そこには木馬体操について著述されている。そして、この木馬が身体文化史上最も古い体操器具であるだろうとされている¹⁹⁾。更に、中世になるとフランスやイタリアで馬に跳び乗ったり下りたり、また馬上でスイング運動をするなどの馬上曲芸（Votigieren）が流行した。体操競技の祖国とされるドイツでのその原形は17、18世紀の支配者階級の間ではやった木製に革を覆った人工の馬を使つての運動、いわゆる「身分相応運動（standesgemäße Übung）」であった²⁰⁾。後に、ドイツでは汎愛主義者たちの間でこれらの諸運動を陶冶の手段として用いるようになった。それらは同じ頃イギリスで流行していたスポーツ（sports）とは意味を異にしている。つまり、ドイツ体操（Turnen）には本来のスポーツのもつゲーム的な要素が少なく、むしろ心身の鍛錬の意味が強かったのである。しかし、もともと芸術的要素をもつドイツ体操には体操の技量を自慢し合うという競争的部分が潜在していたため、当初から競技的な芽があったとみてよいだろう。19世紀末頃からドイツにおいて起こった、いわゆる「スポーツ促進運動（Sportbewegung）」¹⁶⁾は、同時に「Turnen」をより競争的（競技的）にしていったものと言える。一方、1860年コブルク（Coburg）において行われた第一回のドイツ体操祭（Deutsches Turnfest）もまたTurnenの競技化への第一歩であったとみてよいだろう。その後、このドイツ体操の競技化は欧州を中心に急速に進み、1881年には国際体操連盟（以下FIGと表記する）が創設されるまでに至った。しかし当時の体操は、第1回近代オリンピック大会の体操競技の種目に見られるように現在の陸上競技の種目までもを包含した幅広いものであった。その後、各種スポーツをそれぞれ統轄する国際的な団体（国際連盟＝IF）が誕生するにつれ、競技種目が組織的、機能的に分化していった。更に、個別の競技をより魅力的にしていくなための工夫がなされることによって個々のスポーツ種目がそれぞれの特性を発揮しえるものとなった。ちなみに、FIGが初めて採点規則集を作成したのは1949年で

あり、その頃から体操競技がアイデンティティをつくりはじめたと言ってもよいだろう。この採点規則集の作成義務は、第二次世界大戦後はじめて行われた第14回近代オリンピック競技大会（ロンドン）における各国代表審判員間の極めて大きな採点上の見解の相違と、それによる混乱から起こったものであるとされている。つまり、第二次世界大戦を境にして体操競技の世界はより民主化への道をたどったのである。更に、戦後の世界の民主化と社会全体の生活様式の変容はスポーツにも大きな影響を与えたものとみてよいだろう。体操競技の世界においては特に技術的な進歩が目覚ましく、1949年に作られた採点規則集は、1954年ローマで開かれた第13回世界選手権大会を前にして新たに作り直さなければならなかったのである。その後、1964年のチューリッヒにおける大陸間審判員講習会を皮切りに4年サイクルをもって定期的に採点規則集を見直し、必要に応じて改訂してきた。ちなみに1993年版の採点規則集は第8期大陸間審判員講習会（1992年12月に実施）を経たものである。体操競技がこのような歴史の中で、より体操競技らしいものへと発展してきているが、その競技としての柱をなすもの、つまり体操競技の競技性（競争している中心をなすもの）は、大ざっぱに言って「難しさ」、「安定さ」、「美しさ」にあると言ってよい。そして、これら三つの競技要素が客観的に評価されるためにはどのような評価基準が必要であるのか、ということが採点規則集改訂の中心課題になっているとも言える。しかし、この「客観的な評価」をめぐるさまざまな問題が起こっているのも事実であり、本論には一方でこの「客観的な評価」の本質を探ろうとする課題も含まれているとも言える。

4. 規則について

4-1. 一般的概念

広辞苑¹⁷⁾によると、規則とは「のり、おきて、さだめ」の他、「物事の秩序」、「事件または行為の一樣性を表現し、または要求する命題」、「人の行為や事務取扱いの標準となるもの」などである。また、哲学事典¹⁰⁾では規則を「ある状況においてある一定の行為をなすべしと命ずる一般命題」、

その他の説明をしている。これらのことから共通して言えることは、規則は人の行為、行動の範囲を制限する力を持っているということである。そして、規則は一定の社会にのみ存在しえるということであり、それは社会のシステムそのものであるとも言える。そして、その規則は意図的に人の行為、行動を規制しようとする明示的な規則と、人として為すべき当然のこととして一般的に了解されているところの黙示的な規則に分けて考えることができる。前者は、主に違反に対する罰則規定を伴うが、後者はそれを伴わない。つまり、前者は社会の秩序を保持するための最低限必要な要件であり、後者に比べより拘束力を持つ。一方、規則は意図的な存在理由¹⁴⁾の他、人の倫理観から導かれるもので、人の諸価値を基準において作られている。したがって、人の価値観の異なるところでは規則の在り方も異なる。換言すれば、規則は人の価値を表現したり、それを保持するための手段でもある。人の価値観は人それぞれ異なるものであるから、ある意味において規則は人の生き方の自由を束縛することに繋がる。ここに、規則の在り方に対する一般的問題が潜んでいると言える。更に視点を換え、規則を宇宙全体の自然の法則から眺めてみると、その法則に相反する事柄が人の社会に多く見られる。

4-2. スポーツ・ルールの存在性と課題性

パーソンズの体系理論を参考にスポーツ活動の位置付けをみると、スポーツ活動を一文化活動とみた場合、それは行為の下位体系として位置付けられる。そして、この場合のスポーツ活動は人の行為全体からみたときの一行為規則であると言える。つまり、人の行為そのものが宇宙全体の自然の法則に基づくところの一つの規則であり、その行為規則を更に機能的に分化したものがスポーツ活動という規則なのである。このスポーツ活動という規則を更に機能的に分化したものが、それぞれ個々のスポーツ種目そのものであり、またそれらの規則であるとも言える¹⁵⁾。競技スポーツのルールは大きく、そこに関わる人たちの行為の規範を示すものと競技を成立させるための組織の規範を示すものとに分けて考えられる。そこにおける前者の行為規範には、具体的にルールブックに

示されているルールと、そこには示されていないが誰もが一般常識として認めているルール(当為)が存在する。一方、後者の組織の規範はすべて文章化されている。両者とも当該競技スポーツを成立させ、更にスポーツとしての価値を維持、高揚していく上で欠かせない要件である。また、スポーツにおけるルールは一般社会におけるそれと同じように、そこに関わる構成員の行為・行動に対し、一定の制限を加えるという働きを持っている。そして、その制限によって当該スポーツの特徴と価値が明らかにされ得るのである。例えば、学校体育の領域で扱われる器械運動と競技スポーツとしての体操競技は内容的によく似ているが、ルールという立場から眺めたら全く異質のものであるということが理解できる。つまり、前者のルールは教育に関連した諸法則で、後者のそれは当該連盟の持つ諸規則であり、全く異質のルールに基づいて行動していることがよくわかる。

4-3. 男子体操競技採点規則

体操競技の審判活動は、フィギュアスケートや水泳の飛び込みなどと同じように採点活動が中心である。そのことから体操競技の諸ルールの内、中核をなすルールは採点規則であると言える。つまり、体操競技で最もその特徴を表わしている競技会で競技の結果を導く決定的な要件が採点規則だということである。3項で述べたようにこの採点規則は1949年に初めて冊子としてまとめられ、採点規則集としての体裁が整えられた。このことがその後の体操競技大会に参加する選手、役員の採点に対する統一の見解を持つことに大きく役立つ第一歩になったということについては論を待つ必要はないだろう。このことは必然的に選手が日頃トレーニングしていくためのトレーニングの指針にも役立つことに繋がった。1964年、チューリッヒで初めて行われた大陸間審判員講習会は直接採点業務に当たる審判員にとってより客観的な採点をしていく上で効果的であったことはその後の定期的な継続が証明していると言える。特に選手、コーチ、審判員にとって直接拠りどころとなる採点規則集はその後4年毎に改訂され、今日に至っている。この規則集の基本的な構造は、大きく体操競技の採点に関する一般条項、規定演技の採点、

自由演技の採点、難度表から成っている。

5. 適応について

5-1. 一般的概念

心理学事典²⁶⁾による適応の広義にとらえた意味は順応と同義で、その意味を「個体の諸条件、諸特性を、環境条件に合致、適合させ、調整すること」と説明している。この限りににおいては、適応は能力を意味するもので、現存するあらゆる生物は大小問わずこの適応能力を有していると言える。人間で例えると、もし社会の諸変化に何の抵抗も感じず、過ごせることができるとすれば、その人はその社会の変化に容易に適応できているということで、適応能力に富んでいるということが言えよう。しかし、同じ人間であってもその社会の変化についていけない人もいだろう。この場合、心理学的にはただ単に適応能力に欠けているからであるという理由に留めることはできない。それは適応するという作用をおこすためには欲求、同化、調節の三つの契機が必要であるとされているからである¹¹⁾。このうち欲求は感情を意味するものであるが故に、人によっては当然適応し難いことになる。つまり、人が何かを欲するということは、努力によるものではないということである。

5-2. 本論における適応の意味

パーソンズの社会システムを存続させる4つの諸要件はそれぞれ有機的に機能していなければならない。この理論を体操競技に当てはめて考えてみると「形相維持」は、トレーニングやコーチ、審判員の研修会を意味し、「統合」は、体操競技の諸ルールを指すことになる。「目標達成」は、統轄団体であるFIGほか各国の連盟や協会を意味し、「適応」は、各種競技大会を意味することになる。つまり、そもそも何人かの体操好きが逆立ちや宙返りを覚え、自慢比べしているうちに評価の基準を確立し、その輪が広がることによって組織がつくられ、競技会へと発展してきたのである。この場合、「適応」が、なぜ「体操競技大会」を意味するのかという疑問が残るが、それは次のような説明で理解されよう。すなわち、体操競技は

もともと技をもってお互いにその技量を競い合うところからスタートしており、そこに関わる誰もが常に競技力の向上を目指して種々の活動をしているからであり、その競技力の発揮できる場所が、競技大会だからである。更に換言すれば、そこにどんな立派な協会の建物があっても、そこでどんなに優秀な人が大勢働いていても、ある体操競技大会での競技成績が不満足であれば、その協会は十分な評価をされないということである。体操競技というスポーツに最も適した有機体が体操競技大会であるということで、各種競技大会が成功するか否かが体操競技の存在価値が問われる中心に置かれるということである。

6. 考察

前述のように、パーソンズの社会体系理論を応用すると体操競技の世界では、統合はルールを意味し、適応は体操競技大会を意味する。したがって、ここでは体操競技の諸ルールと競技大会のそれぞれの在り方と、関わり方について考察することになる。また、考察の視点として、特に体操競技界を含め、現代社会において問題視されている諸点を取り上げてみた。

6-1. 体操競技大会の変遷とルールの関わりについて

意図的なルールの原初形態は人の行為から導かれる行為規範であり、その規範は複数の人が存在したときからはじまると言ってもよい。つまり、それはそれぞれ異なった価値観を持つ人たちの行為の制限をすることによって相互扶助の精神を芽生えさせ、社会生活をよりスムーズにしていこうとする全く自然の哲理に基づいてできるものである。この考えにしたがって体操競技をみると、その原初形態は5-2項で述べたように技の自慢比べであったと言ってもよいだろう。自慢比べという行為は一種の競争であり、そもそも人の本能的欲求(闘争心)から導かれた行為である。体操競技のルールのはじまりは、その自慢比べに参加した人たちがお互いに納得すべく評価の基準を設けたことであると言ってもよい。それは、例えば「より高い」、「より美しい」、「より安定している」、「より難し

い」などの単純な評価基準であったはずである。しかも、その評価の仕方はあたかも人々が絵画や陶芸品など芸術品を鑑賞して自らの主観によってそれらの評価するのと似ていたに違いない。そして、これらの基準は二人だけの場合には有効であったが、三人以上の人が同一の場で評価を得るときはそれを数字で表わす必要に迫られたのである。体操競技の世界で評価の結果を最初に点数で表わしたのはいつであるかは定かではない。またそのこと事態は本論の課題ではないのでそれを知る必要もないが、その先達的存在にあるドイツにおいては古くから評価の手段として数字を使っていたにちがいない。いずれにしても点数による評価の結果の表し方は人の知恵から生まれたものである。つまり人はいつの時代においても、より良いものを求めて努力しているのである。しかし、問題は未だに何が善くて何が悪いのかの判断に苦しんでいるということである。体操競技大会の歴史的流れを技術的側面から分析してみると、時を重ねる毎に自由演技においてはその内容がより高度(高難度)になってきていることに気がつく。また、個々の技の表現の仕方も技術的に高度化してきている。その結果は採点上にも顕著に現れた。多くの選手が限りなく10点満点に近い得点をするという傾向である。一方、表現活動全般にみられる創造性という立場から演技内容の変遷を眺めると、その都度内容の是非を問われるケースも多い。ルールの改訂は主にこのような理由からなされてきたと言っても過言ではないだろう。このようにみると、ルールの改訂は、一方で選手のある演技内容を規制する意図でなされ、他方ではルールの持つ行動への規制的作用を更に強化する(この場合、10点満点からより遠ざけることを意味し、演技力全体の理想を高めることである)ことによって体操競技大会そのものを常に無理なく、安定した状態に保とうとする働きをしているということに気がつく。

6-2. 演技内容の難度志向とルールの関わりについて

自然界を例えた「弱肉強食」という言葉がある。一方人間社会には「法の下での平等」という言葉がある。この二つの言葉は自然を善とみたとき、相

矛盾するもので人間社会における矛盾を肯定していることを表したものである。体操競技の本来的立場で難度技を考えると、より高度な難度技をより多く演技すれば、それだけ有利に評価されなければならない。しかし、ここでも「法の下での平等」という精神が生きている。それは、あたかも人間がより人間らしく生きるために考え出した知恵であるかのようにである。具体的には採点規則で最低限の難度技要求数を定めているということである。しかし、ルールの改訂時期が近づくとしばしばこのことが論議の的になる。賛否両論であるが、このことはスポーツ活動を教育の手段として維持していくか否かに大きく関わる問題である。ある一時期高難度技に対する減点緩和の措置をとったルールがあった（1968年版採点規則集）。その意図は選手たちに対し高難度技への挑戦意欲を促すということにあった。しかし、その結果各種体操競技大会では演技の安定性を失い、何となく醜い大会になっていった。そのことに気がついた関係者は次のルール改訂時にその制度を廃止し、新しく決断性、独創性、熟練性に対する加点制度を設けたのである。しかし、そこでは今度、採点する側、つまり審判員の間で多くの問題を抱えるに至ったのである。それは審判員がいかにして統一見解を持つことができるかということである。特に、体操競技がより国際化した現状においてはどんなに形相維持（この場合は審判員研修会の意味）の努力を計ったとしてもこの問題解決は至難なことである。なぜなら体操競技の技術が日進月歩、絶え間なく進歩・発展しているからであり、すべての審判員が同時にそこについていけないという問題があるからである。つまり、その進歩・発展についていける審判員とそうでない審判員の間で、知らず知らず採点の基準が異なってしまうということである。

6-3. ルールの加点制度への対応について

前項で触れたように、極度な難度志向は体操競技のトータル的な進歩・発展を損ねることに繋がる。そのことから決断性、独創性、熟練性という三領域の加点制度を設け、問題解決に処した。しかし、この制度は結果的に十分な適応を見ず廃止されることになった。その主な理由は体操競技に

おけるこの三領域の概念規定の困難さ、更に世界的な見解の統一の難しさにあった。このことは一面、パーソンズの言うところの形相維持への努力不足ということに繋る。それは具体的には審判員に対し、徹底的な統一見解のための研修を怠っていたということに繋ることになるだろうが、それ以上に急速な技術の進歩が統一見解の困難さを助長していたとも言えるだろう。つまり、体操競技はその原初形態にみられたのと同様、進歩・発展した今日においても「比較」が、発表された演技の優劣を決定づける重要な要件になっているということである。したがって、この点から考えると加点三領域（決断性、創造性、熟練性）の加点に値する基準を一定に保つことが困難であり、また体操競技の更なる進歩・発展を考慮すれば、一定に保つことは必ずしも得策であるとは言えないだろう。

6-4. 競技大会方式の改変について

FIGは、1992年より新しい競技大会のシステムを導入した。その決定は1990年の総会で決議された。この改変の主なきっかけは従来行われていたワールド・カップ大会の衰退に対する危機からであると言っても過言ではないだろう。それは、そのワールド・カップ大会を廃止し、新たに世界選手権大会を位置づけたことから容易に理解できよう。この5回に渡って開催されてきたワールド・カップ大会がなぜ廃止せざるを得なかったかをここで考えてみなければならない。つまり、存在していたものを無くすという意図的行為の背景が何であったのかということである。それは、パーソンズの理論を借りるとここでも直接的には社会をスムーズに機能させるための四つの要件のうちの「適応」が問題になっていると言ってよい。次に、なぜうまく適応できないかということを考えてみる必要に迫られる。本来、体操競技は技の自慢比べから出発したものであり、競争を第一義としていることからすれば、そこに選手がいて、審判員を含む必要最低限の役員がいれば、大会は成立するし、そのことだけを考えたときはそこには何ら大会を廃止しなければならないという問題は起こらない。したがって、その適応の問題は本来の体操競技以外の付帯的必要条件において起こっ

ているということが理解できるのである。それは次の項で述べられているように社会をスムーズに機能させるための他の要件の一つである「目標達成」と深い関わりがあると言ってよい。つまり、全世界の体操競技最高統轄団体であるFIGが何をねらいとして諸競技大会を開催し、運営しているのか、というところがこの問題のキー・ポイントになっているということである。次にその点について考察してみたい。

6-5. FIGの政策的戦略とルールの関係

どんな団体であっても、その団体が進歩・発展していくことを願って活動しているに違いない。しかし、この「進歩・発展」とは何を意味しているのかということを明確に理解して活動しているか、というといささか疑問である。FIGの諸政策を決定する最高決議機関は総会(FIG-Congress)であるが、その総会へ提案する主な案件については、理事会(Executive Committee)や各種委員会(Technical Committee)で十分議論されていることから理事会や各委員会の意見が総会にかなり強く反映されると言ってよい。つまり、選挙によって選ばれたFIG役員のお考え方が政策決定の方向づけに大きな影響を与えているということである。その最も中心に位置づくのがFIG会長であるが、その会長が最近の総会における会長報告の中で次のような主旨に当たることを述べている。即ち、それは各種スポーツ界で最も古い歴史を持つFIGは今、その古い歴史と伝統に支えられて機能しているが、今日の社会的傾向、そしてそのニーズにできていかねばならないということである。しかし、古き善き伝統とモダンな社会の在り方を適合させていくことは大変困難なことであり、その努力をしていかねばならないとしている⁹⁾。具体的には、体操競技の今日の発展はただ単に競技大会を開催し、それを運営するというのみではみられないということである。つまり、ハイテク、高度情報化の産物とも言われるスポーツ界の商業主義化現象にある今日の社会に適応できるような体操競技界にしていかなければならないということである。このことは、国際オリンピック委員会(IOC)の政策とも符合するものである。このような観点でFIGがワールド・カップ大会を廃

止し、毎年世界選手権大会を開催するという意図を考えてみると、その方が商業的価値が高いと判断したからであるということが理解できよう。競技スポーツの世界において、競技会システムは単に経済的に影響を及ぼすだけでなく、むしろ技術的發展に大きな影響を与えてと言っても過言ではないだろう。前述したように体操競技における技術の進歩・発展は体操競技の進歩・発展そのものを意味するものである。現代社会に生きる選手・役員が現代社会にマッチした競技大会を望むのはごく自然なことであり、FIGの進む方向はその限りにおいては誤っていないと言えるだろう。

7. まとめ

ある事柄が発展的に存続していくか否かは、その事柄を支える諸要件が常に社会を中心に肯定的に機能しているか否かにかかっている、ということがパーソンズの社会学理論から理解できる。本論ではこれまで、体操競技における「統合(ルール)」と「適応(体操競技大会)」の関係について主にルールの改訂と適応というテーマのもとで論じてきた。考察の結果、明らかにされたことは体操競技界におけるルール改訂が先ず、技術レベルの時代的、国際的相連などからくる採点上の混乱を避ける意味において、更に国際社会の社会的変容に適応する意味において必要であるということである。このことは先行しているある事柄の動向に対し、そこで起こった問題解決のための一手段としてルール改訂が位置付けされているということの意味している。つまり、ルールを改訂することは、結果的にその事柄の発展を促すことに繋がるかもしれないが、それ以前の第一義的意味は現状の問題解決のためであるということが言える。したがって、社会の変化が目まぐるしいこの時代における諸ルールの改訂が容易でないこともよく理解できるが、改訂されたルールが社会全体に適応されなければ何の意味をも持たないということも本論を通して確認することができた。体操競技の世界においては、技の自慢比べからはじまり、その自慢比べが徐々に組織化され、今日に至っていることを考えればそのシステム化、つまり諸ルールは体操競技(自慢比べ)の変化に即

して改訂されてきたものであると言えるし、今後も社会の変化、技術の変化、更には人の考え方、生き方の変化に応じての諸ルールの改訂を余儀なくされるだろう。したがって、そのルール改訂に関わる人は特に、体操競技の本質を見失わないよう、そして社会全体に適応し得るルールづくりに専念することが望まれる。

(付記)

本論の要旨は、日本体育学会第43回大会において口頭発表済みである。

尚、論文の体裁を整えるため、必要な修正を加えた。

注

1. 現代社会における各種行為・行動は、マス・メディアの影響を受け易い。特に競技スポーツは、近代オリンピック競技大会に見られるように、競技の日程、時程などの進行予定をはじめ、競技運営の在り方までテレビ関係者に大きな影響を受けている。体操競技においては、例えば採点の基準や得点算出の方法が一般の人に解りにくいことからそれらの簡素化が求められている。このことは、観客がただ単に体操競技選手の演ずる技術を鑑賞するというにとどまらず、その場その場での競争の経緯、結果を知ることによって、観て興奮することを求めているものと言える。したがって、観ておもしろくないスポーツからは観客がはなれていってしまうことに繋がる。そして、この客ばなれが体操競技全体の進歩・発展に悪影響を与えるということに繋がってくる。このような意味において、競技スポーツは今やそこに参加する選手やコーチ、審判員など、直接競技に関わる人たちだけのものではなく、直接観戦する人たちをはじめテレビの画面を通して観戦する人たちのものでもあるということを考えなければならない。
2. 本論の意図は、パーソンズの理論の一部である、社会システムの機能要件の分析に基づいてつくられたと言われる、AGIL図式の考え方を体操競技という一社会に応用してみたとき、Adaptation (適応) と Integration (統合＝ルール) の関係がどのようになるかということ

の検討を通して、体操競技のルールの在り方を考察しようとするものである。したがって、このパーソンズ理論は本論を進める上でのきっかけにすぎない。

3. 社会は常に変化し得るものであり、その変化していく社会の在り方を検討していく場合に役立つという意味であり、ここでは特に、注2で示したAGIL図式を意味している。
4. ここで言う「意図的な存在理由」とは、ある事柄がその目的を達成するために、達成を容易ならしめるという理由で規則が存在しているという意味である。例えば、体操競技が体操競技の本来の姿を崩さず、体操競技らしさを保持するための諸規則はそれに値する。
5. ここでは、規則という言葉のもつ意味を広義にとらえ、体系と同義にとらえて述べている。その意味は、宇宙全体の自然の法則からみると、人のつくる文化はときに自然の法則に反するようなこと(例えば、環境破壊)に見えるが、人がつくる社会の営みを、自然界における一生物の行為・行動としてみたとき、すべて自然の原則に従っていると言わざるを得ないということである。

文 献

- 1) Diem, C. (1960) Weltgeschichte des Sports. Cotta-Verlag : Stuttgart.
- 2) FIG (1967-1992) bulletin, No.1 - No.154.
- 3) FIG (1979) Gerätenormen.
- 4) FIG (1982) Technisches Reglement.
- 5) FIG (1982) Statuts.
- 6) FIG (1989) Gerätenormen.
- 7) FIG (1989) Technisches Reglement.
- 8) FIG (1991) Technical regulations.
- 9) FIG (1992) bulletin, No.154, pp.37-41.
- 10) 林達夫他監修(1971) 哲学事典. 平凡社 : 東京, p.307.
- 11) 同上書, p.971.
- 12) Internationaler Turnerbund (1975) Wertungsvorschriften der Männer.
- 13) Internationaler Turnerbund (1979) Wertungsvorschriften der Männer.
- 14) Internationaler Turnerbund (1985) We-

- rtungsvorschriften der Männer.
- 15) Internationaler Turnerbund (1989) We-
rtungsvorschriften der Männer.
- 16) 岸野雄三監修 (1981) スポーツ科学事典. プ
レスギムナスチカ: 東京, pp. 274-275.
- 17) 新村出編 (1969) 広辞苑. 岩波書店: 東京.
- 18) Wolfgang Pahncke (1983) Gerätturnen
einst und jetzt. Sportverlag Berlin: Ber-
lin, p. 8.
- 19) Ibid. p. 8.
- 20) Ibid. p. 8.
- 21) パーソنز, T. (矢沢修次郎訳) (1971) 社
会類型一進化と比較. 至誠堂: 東京.
- 22) パーソنز, T. (井門富二夫訳) (1980) 近
代社会の体系. 至誠堂: 東京.
- 23) パーソنز, T. (丸山哲央訳) (1991) 文化
システム論. ミネルヴァ書房: 京都, pp. 140
-141.
- 24) 菅原礼編著 (1980) スポーツ規範の社会学.
不昧堂: 東京.
- 25) 滝沢康二 (1991) スポーツにおける審判員の
倫理. 日本体育大学紀要: 20(2), pp. 83-90.
- 26) 梅津八三他編 (1969) 心理学事典. 平凡社:
東京, p. 304.

平成5年9月30日受理